

風 土 論 考 (続編)
——経営学的究明——

裴 富 吉

も く じ

I はじめに ——いま、なぜ風土論が問題なのか——	(iii) 風土類型について
II 要約〔その1〕 ——『経営学の基礎研究』——	V 風土の社会科学的意味 ——日本人と経営問題：「人と人との関柄」 概念で考える——
III 要約〔その2〕 ——『現代経営学の基本問題』——	=以上、本号=
IV 和辻『風土』の評価 ——和辻「風土論」からなにを学ぶか——	VI 風土問題と企業経営 ——風土論と、経営学の視点——
(i) 風土をどう考えるか	(i) 風土の地域性
(ii) 和辻『風土』の評価	(ii) 自然-生態系-工業
=以上、第31号=	(iii) 地域主義とはなにか
	VII むすび

IV 和辻『風土』の評価〔承前〕

(iii) 風土類型について

和辻『風土』の評価となれば、彼が同書中で示した三つの風土類型を吟味しておく必要があらう。

和辻の直観と芸術的感覚が生かされているという、その風土の三類型（モンスーン・沙漠・牧場）に関しては、和辻風土論の問題性を集約的に表わす批判が提出されている。既述にあったような、彼の風土類型論は拡張はおろか、部分的改造にもたえられないほどお粗末なものだという批判は、その最右翼をなすものであった。

和辻は三つの風土類型にくわえて、第四、第五の風土類型たるアメリカ的風土とステップ的風土（ソ連）の二類型を出していた。しかしこの彼の意図は、当初より問題含みの風土類型論が保有していたはずのとりえすらも生かしえずに、その観念性——直観性をともなわないもの——の深淵にはまりこむはめになっている。和辻の『風土』を「随所にイデエを見る眼」として称賛していた谷川徹三は、和辻が三つの風土類型にアメリカ型風土とソ連型風土を、その延長線上でアナロジー的に付加したため、いささか説得力の弱いものになったと評していた。和辻の思想はつねに感覚的根源性をもっているが、それがないところでは説得力が弱いということにな

る¹⁾。

風土類型論の誤謬は、「モンスーン地方から沙漠地方を経て地中海に入り、古のクレタの南方海上を過ぎて初めてイタリア南端の陸地を瞥見し得るに至った朝」²⁾の印象を、そのままヨーロッパ全体にあてはめてしまったところにあった³⁾。したがってアメリカ型とソ連型の風土類型を、はじめの三類型に足す段になると、もはや和辻が得意とした直観と芸術性は少しも生きていない。

なかんずく、和辻が『風土』でおこなったような比較風土論は、思想の風土性がなによりも思想の空間性を表わしていることを明瞭にしえても、またそれがあまりにも風土のみを強調しすぎることに對しては、風土一元論・風土的決定論になるとして、批判も生じるのである⁴⁾。

経営学の立場から風土問題を考察しようとする筆者にとって、和辻風土論における思索の利用は慎重を期する必要がある。

たとえば、和辻の風土類型は非常に独創的で表徴的であり、彼の意図からすれば十分な意義をもつが、分類指標の厳正さからいえば、むしろ〈水田型・牧場型・遊牧型〉とすべきだという意見がある。とくに牧場型と沙漠型は乾燥という点で、ある程度同系列にはいるであろうが、モンスーン型はその点で別系列の風土類型とみなすという。さらに、モンスーン型風土、なかでも中国および日本を主とする温帯モンスーン地帯は、冬の乾燥期に麦作ができる点で、ヨーロッパの乾燥牧場型風土とまったくあいられないものでもなく、夏と冬で湿潤と乾燥とが交代する。ここに温帯モンスーン文化の包容性が考えられるとする⁵⁾。

この見解は風土問題を、より多角的関係、より立体的規模において考えることを要請している。このことは比較風土論というものが比較経営学に対して有する緊密な関連性を配慮するに、相当に重要な課題を提起している。比較経営学は比較風土論の裏うちなくしては満足な展開をなしえないだろう。

若干、視野をかえて論じてみよう。

例をあげれば、東洋と西洋の問題などは、個別のレベルにおいて設定できると同時に、また複数のレベルの組みあわせからアプローチする。思想(文化)の特質を風土的条件とのかかわりから理解し、あるいは社会的な構造と関係づけて解明することは、ときにきわめて実り多い方法である。だが和辻の『風土』についていうなら、その分析は鋭い洞察にみちているものの、三つの類型はあまりにも概括的で現実に即しない面がある。この点については自然・人文地理学などの実証的な成果を参照しなければならない⁶⁾。

経営学の立場から、そうした実証的な研究をすすめることが必要である。経済地理学という学科があるなら、これとならんで経営地理学——経営学の分野でみられる名称としては経営立地論がそれに近いものであろう——という学科があってもよいはずである。それは経営問題が風土問題と切りはなしえない関係をもつことを教えてくれるにちがいないだろう。

そのさい考慮されるべきは「時間の契機」である。また東洋-西洋 (East-West) という図式は深い根をもっているが、しかしそれは唯一のものとはいえない。「南北問題」、極北の地域、オセアニア、アメリカおよびアフリカ大陸の諸社会など、東西のどちらにも含まれない文化が存在している。これらの文化をとおして東洋-西洋の問題もおそらく新しい光のなかに現われてこよう。東西の対比は確かに重要であるとしても、決定的なものではなく、むしろある意味では共通の地盤のうえでの差異にすぎない。それは人類文化の発展史上の相対的な問題であるとともに、共通の人間性という主題のひとつの変種というべきものなのである⁷⁾。

日本の経営学は、以上のような眺望を可能とする学問展開をおこなっていない。自国の経営問題を実証的に追究する手はずすら十分にとのえられていないのだから、あえて指摘するまでのことはないかもしれない。この国の経営理論は欧米経営学の研究を中心に展開してきた。このことはこの国の斯学の強みであると同時に弱みでもある。比較経営学的見地をえやすい地点にいることは事実であるけれども、それを定置化するための自己の土台が軟弱なのである。外国のことがらを勉強するのは自国をするためだと思うが、この国はいままで自国の研究をぬきにして外国の勉強ばかりおこなってきた。風土問題が頭に浮かんでこなかった事由は、はっきりしている。

比較経営学における研究方法の立場は多くの次元が考えられる。二国間、複数国間、東西、南北、資本主義と社会主義。これらのもののいくつかの、任意の組みあわせも想定できる。一国内でも比較の要因はいくらでもある。

筆者が本稿でとなえている風土論的経営学のひとつの具体化となる《地域主義の経営学》は、一国内における「地域」「地方」を単位とする「経営と風土の接点」からのアプローチになるろう。

この研究志向にとってひとつのヒントとなる風土論の研究がある。それは三澤勝衛の風土論である。三澤には日本の風土論のなかで重要な意味をもつ文献——『風土産業』昭和16年がある⁸⁾。三澤は長野県内各地を調査し、生活に密着した、また可能論を含んだ風土論を展開した。彼のいう風土とは、概念としては適地適作の〈地〉に相当するものになる。実際には、大気と大地の接点にくりひろげられることがらに対して、風土という名称をつけている。このような立場から、三澤は長野県内の地域特性を説明し、それぞれの自然に適した産業の育成をも主張した。こうした積極的な風土論は長野県内の土地と生活、そこでの農作業や工業の作業について具体的に熟知していたからこそ生れたものである⁹⁾。

三澤の風土論がとりあげた地域は長野という一県であったが、その内において細分された各地域に関する比較風土論になっていた。彼の主張は「地域経営論」にもなっている。風土の特殊性にねざした経営論の展開がある。比較風土論⇔比較経営論の連関がみえてくるのである。

注

1) 谷川徹三「《随想》イデアを見る眼」『思想』第443号、1961年5月、100頁。

- 2) 和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波書店, 昭和10年, 64頁。
- 3) 飯沼二郎『歴史のなかの風土』日本評論社, 昭和54年, 16頁。関連して, 伊東光晴ほか『日本の経済風土』日本評論社, 昭和53年, 174頁も参照のこと。
- 4) 小泉 仰・小山宙丸・峰島旭雄編『比較思想のすすめ』ミネルヴァ書房, 昭和54年, 41頁。
- 5) 栗原藤七郎『東洋の米 西洋の小麦』東洋経済新報社, 昭和39年, 6頁。
- 6) 梶芳光運監修 哲学シリーズ第3巻 見田政尚・峰島旭雄責任編集『東の思想・西の思想』三修社, 昭和50年, 38頁。
- 7) 同書, 38-40頁。
- 8) 三澤『風土産業』昭和16年は、『三澤勝衛著作集』第3巻「風土論II」, みすず書房, 1979年に収録されている。拙稿「風土論覚書—三澤勝衛『風土論』の今日的意義—」, 札幌商科大学『論集』第28号〈人文編〉昭和56年1月を参照のこと。
- 9) 福井英一郎・吉野正敏編『気候環境学概論』東京大学出版会, 昭和54年, 26頁。

V 風土の社会科学的意味

——日本人と経営問題：「人と人との間柄」概念で考える——

日本の経営学は日本の経営という自己のうちにある現実的な研究対象をまっとうにとりあげてこなかった。またこの国にどのような学説理論があるのかについての体系的な解明もみられないようである。最近の日本経営学会が二年連続で「日本的経営」という字句をいれた統一論題をかかげたという事実〔昭和52年・53年〕は、そうした状況を如実に物語っている。日本の経営学は自己のおかれた状況とは別個に、観念的に遊離した方向をめざし理論的営為をおこなってきた。このことはこの学問が歴史的に形成してきた一大特質である。

ある哲学者はこういう。もし哲学を学ぶ者であり、この日本に生活する者でありながら、問題意識をただ西洋の地平にかぎろうとする態度をとる者に対しては、はなはだ遺憾ながらそこに歴史的意識の欠如をみる¹⁾。いつまでも歴史も文化も伝統もまったくちがった国々の哲学を頭でつぎつぎ理解するだけでは、自己の哲学をついにもちえまい。また自己の土着の哲学なり思想なりが生れるには、単に頭脳の明晰さのみが問題なのではない。そこには彼自身の生き方が同時にかかっているのである²⁾。

日本の学者、——われわれにとっては経営学者、にとって頂門の一針たる意見表明が、そこに披露されている。日本の経営学界で出版されている書物は、あいもかわらず上述における学問性批判の見地から逃げられないものばかりであろう。筆者が〈日本経営学説研究〉³⁾という研究領域で体験しえたことは、日本の経営学者たちが学問に対して保持する感覚は「自己の哲学」を確保しているとみなせる識者でも——そうでなければ論外であるが——、「ちがった国々の哲学」(→経営学説・理論)を頭でつぎつぎ理解するだけの学問に終始しているということであった。日本の学問としての日本の経営学が、自己存在を客体視も相対視もできていないということは、そうした背景があるためであった。斯学会内において本格的な学問上の批判のやりとり、論争

が成立しえないでいるのも、そうした事情による。

ある政治学者の言を聞こう。こういう。

われわれはなによりも日本の政治学者として、まず、日本の政治的現実の要求する課題にむかって答えなければならない。アメリカの政治学がいかに発達しているからといって、その体系なり構成なりをそのまま模倣した「政治学」が何冊生れたところで、それでこの国の政治学が隆盛になるわけではない⁴⁾。日本の経営学にとってもなんと耳の痛い話ではないか。日本の経営学もその例外ではないからである。当分のあいだ、その政治学者による「日本的な学問」批判の視角は有効性をもちつづけるにちがいない。

日本側のことばかりいっては不公平なので、逆の例を考えてみたい。たとえば、R. ベネディクト『菊と刀』は、こう批判されている。それはきわめて論理的であり分析的であって、学問的香りの高い書物であるが、理論に走って歴史的現実から遊離しているむきがないでもない⁵⁾。ベネディクト『菊と刀』は、彼女がアメリカの地にいながら、日本関係の文献研究と、日本人系アメリカ人との接触のなかで、書きあげたものであった。その意味においてその書物は理論上、みのがしえない現実遊離性と学問的観念性をアメリカの学問として示していた。こうした危険性は彼我を問わないものなのである。

本稿は主題を「風土論考」としてある。この風土問題にもっとも深いかかわりを持ち、この契機を基底にふまえて学問研究をするほかない分野として、農業経営学がある。この分野ではつぎのようなことがいわれている。

日本農業の実態をふまえない輸入農業経営学が、日本の土壤に根を下して成長できず、実際の経営実践にあまり役立たなかった⁶⁾。

日本の経営学のばあい、「実際の経営実践」に対していかなる学問的な対応姿勢をとるのかという問題はひとまずおいても、それとのかかわりをあまりもてないままに、独自の研究志向を保守してきた。

「土着の学問の発想」という題名の著作をしたための論者はこう述べている。日本語でものを考えることもまだ十分でない私たちが、舌をかむようなあちらのことばでなにがわかるのだろうか。ことばの中身は国によってかわり、時代によってかわっていく。どういう中身に対してどういうことをしたかが問題なので、それをはなれてことばだけを覚えてもしかたがない⁷⁾。ニッポンのコトバとニッポンの思想とのカンケイがほとんど考えられていない。戦時期の流行語「ニッポン精神」が本来の語義で考えられていない⁸⁾。学者ももともと平民なのだが、自分のなかの平民性を切りすてたところで学問用語をこしらえあげた。自己のなかの平民と知識人との対話が断絶した⁹⁾。

本稿の筆者がつとに指摘してきた日本知識人の二重の自己疎外化現象、——欧米理論崇拜・

が成立しえないでいるのも、そうした事情による。

ある政治学者の言を聞こう。こういう。

われわれはなによりも日本の政治学者として、まず、日本の政治的現実の要求する課題にむかって答えなければならない。アメリカの政治学がいかに発達しているからといって、その体系なり構成なりをそのまま模倣した「政治学」が何冊生れたところで、それでこの国の政治学が隆盛になるわけではない⁴⁾。日本の経営学にとってもなんと耳の痛い話ではないか。日本の経営学もその例外ではないからである。当分のあいだ、その政治学者による「日本的な学問」批判の視角は有効性をもちつづけるにちがいない。

日本側のことばかりいっては不公平なので、逆の例を考えてみたい。たとえば、R. ベネディクト『菊と刀』は、こう批判されている。それはきわめて論理的であり分析的であって、学問的香りの高い書物であるが、理論に走って歴史的現実から遊離しているむきがないでもない⁵⁾。ベネディクト『菊と刀』は、彼女がアメリカの地にいながら、日本関係の文献研究と、日本人系アメリカ人との接触のなかで、書きあげたものであった。その意味においてその書物は理論上、みのがしえない現実遊離性と学問的観念性をアメリカの学問として示していた。こうした危険性は彼我を問わないものなのである。

本稿は主題を「風土論考」としてある。この風土問題にもっとも深いかわりを持ち、この契機を基底にふまえて学問研究をするほかない分野として、農業経営学がある。この分野ではつぎのようなことがいわれている。

日本農業の実態をふまえない輸入農業経営学が、日本の土壤に根を下して成長できず、実際の経営実践にあまり役立たなかった⁶⁾。

日本の経営学のばあい、「実際の経営実践」に対していかなる学問的な対応姿勢をとるのかという問題はひとまずおいても、それとのかかわりをあまりもてないままに、独自の研究志向を保守してきた。

「土着の学問の発想」という題名の著作をしたための論者はこう述べている。日本語でものを考えることもまだ十分でない私たちが、舌をかむようなあちらのことばでなにがわかるのだろうか。ことばの中身は国によってかわり、時代によってかわっていく。どういう中身に対してどういうことをしたかが問題なので、それをはなれてことばだけを覚えてもしかたがない⁷⁾。ニッポンのコトバとニッポンの思想とのカンケイがほとんど考えられていない。戦時期の流行語「ニッポン精神」が本来の語義で考えられていない⁸⁾。学者ももともと平民なのだが、自分のなかの平民性を切りすてたところで学問用語をこしらえあげた。自己のなかの平民と知識人との対話が断絶した⁹⁾。

本稿の筆者がつとに指摘してきた日本知識人の二重の自己疎外化現象、——欧米理論崇拜・

追従と日本の現実問題の無視・等閑視が批難的になっているようである。

いま、日本の経営学に切実に求められているのは、こういうことである。ほんとうの日本の土人の子らと語りあう教師、土人のなかで闘う弁護士、いなかの医師、看護婦、助産婦、保健婦たち、ふるい土方や左官や棟梁たちとともに働く技師たち、このようないつも土民とともに生きる階層のなかで、ミヤコの教授、裁判官、大学病院の博士などのガクモンをご苦労であったといえるだけの「学問」が発見せられ、発掘されて出てくるだろうこと、これである¹⁰⁾。

残念ながら、この国の学問に関しては、そうではない例が多い。

- (1) 熊本水俣病事件における熊本大学医学部水俣病研究班と東京工業大学清浦雷作教授(アミン説をもって反論)の関係。
- (2) 新潟における第二水俣病発見のときの、新潟大学教授陣と横浜国立大学北川徹三教授(農薬説の主張で反論)の関係。
- (3) イタイイタイ病における萩野 昇〔および河野 稔〕の発見と、その学会発表は、萩野博士が民間臨床医であったために日本の大学偏重の学界のなかでは無視され、同医師はしばらくのあいだ地域からも孤立させられたという事実。

ミヤコの学究たちが学問の立場においていかなる行動をとってきたのか、重大な問題がありそうである。日本の経営学者たちが上述の実例に対して、なんら学問的に有効な発言をしえなかったことも事実であろう。この学問はもともと現実から遠いところにいるのだから、あえて指弾されることではないかもしれないが。

「土着の学問の発想」をいう識者はこうもいう。筆者もその主張に賛同する。

私は外国のことはおぼえないほうがよいなどと愚論を出してはいない。ほんとうに外国のことは身に付け、その魂に参入し、その語意語感に聴きいった人たちは、たとえ日本のことはしらなくてもすぐれた学者であり、またそのような学者は、この列島の土人が生活のなかに包蔵する〈学問〉—真の意味での科学サイエンスを無視するようなことはしない良心コンシアンスをもつものである¹¹⁾。だが、はたして日本の研究者のうちいかほどが、この到着点到着点を、自分の研究における出発点出発点に転換し利用しているだろうか。それはきわめてみつけにくい現状にある。

本節のもともとのねらいは、日本人と経営問題—日本(人)の経営問題というべきものか? —を、和辻式の「人と人との間柄」という概念用具を借りて、究明をおこなおうとすることにある。

和辻はわれわれが「人と人との間柄」として使っている語句を〈人と人との「間柄」〉¹²⁾と用いている。——カッコ「」のつき方が異なる。

和辻はいう。日本人が「その特殊な存在の仕方を通じて人間の全体性を把握するその特殊な仕方」¹³⁾は、「しめやかな激情、戦闘的な恬淡である」¹⁴⁾。とくにこれは「家」としての日本の人間の存在のしかたが、しめやかな激情、戦闘的な恬淡というごとき、日本的な「間柄」を家

族的に実現していることにほかならない¹⁵⁾。

関 栄吉は、和辻の『風土』昭和10年が公刊されるまえの時点において、和辻の考え方は日本国民性の欠点も認めるが、いずれかといえば、その美点を描きだすことにある。積極的に日本主義を樹立する態度には出ないで、大体において芸術家的観照の立場にあると論評していた¹⁶⁾。こうした和辻の立場は、一度冷たく客体的につきはなして検討されねばならない。そうでないと、芸術家的観照を社会科学の検討題材にすることはできないからである。和辻の日本人観はその程度の倫理的な分析しかなしえていないのである。

和辻倫理学・風土論の問題は、そうした地点を通過させたのちに、はじめてその真価が試されることになる。

和辻が自信をもって個人主義を否定する根拠には、ひとつは「人間」というコトバの解釈として「ひとにして世の中」という二重構造の発見があり、ほかには日本古代社会以来の民族共同体というイメージ〔日本古代国家〕があった¹⁷⁾。彼は日本では「家の利己主義」はあっても、家のなかで家族員相互の利己主義、快樂主義、個人主義は育たないほどに「家の全体性」は強いとみていた。ここに全体主義ないし集団主義の根がある。この根を失わなければ「家」以外の社会集団にあっても、一般に生活共同体を有力ならしむことができ、このことを自覚することが共同社会を健全ならしめ、人倫を維持するゆえんであるとする¹⁸⁾。

和辻がいうその根は、現在の日本社会においても確かに失われていない。企業中心主義(企業エゴイズム、我が社意識)、マイ・ホーム主義を想起してみると、それは若干の変形をともないながら確実に継続している。だが和辻による生活共同体の有力化という事態に関する認識が、現在の日本社会における状況をふまえて、なお同様にしうるかどうかに関しては疑問がある。

いずれにせよ、和辻倫理学・風土論は一步前進すべき時にきている¹⁹⁾。筆者は、そのためには、経営学の立場からできる努力として、彼の「人と人との間柄」という概念で捕捉された「日本人の特殊な存在の仕方」を、経営学の視座から徹底的に究明してみることが大切であると考えている。

問題は、結局のところ、和辻の念願とする、日本の文化の伝統と、その底にある国民精神の卓越性を守りぬこうとした意図を²⁰⁾、経営学が、自国の現実経営問題に直面しながら、どのように受けとるかにある。

ともかく「和辻の学問と思想は、現在および将来の日本にとっていかなる意味をもつのであろうか」という問いがつけつけられている。これは冷静な研究者にとっては容易に答えがたい難問である。彼の学問が近代日本思想史におけるひとつのすぐれた遺産であることを認めるならば、そしてまた日本人が将来にむかってどのような理想をもつにせよ、日本ないし東洋の文化伝統から完全に脱離した未来をもちえないとするならば、思想家としての和辻の存在をそう簡単に切つてすてるわけにはゆかない²¹⁾。「和辻倫理学における哲学的諸問題」は、われわれ自

身が、——哲学者として、思想史家として、あるいは日本文化の研究者として、そして経営学者としても、それを継承することによって、みずから考えてゆく課題である²²⁾。

経営学も「和辻倫理学における哲学的諸問題」に関して、独自の分析視点をもって検討をくわえなければならない。日本の経営のなかに脈打つ「日本人の特殊な存在の仕方」→「人と人との間柄」という問題が、明確に研究対象とされるべきなのである。いままでの経営の一般理論と、日本の経営の特殊相をむすびつける《媒介の論理》が要求されていることになる。日本の経営学が現実的分析力をもちうるようになるのは、その《媒介の論理》を確実に設定しえたのちのことであろう。

和辻倫理学・風土論は、さらにきびしく批判される余地がある。和辻にはまずこういわねばならない。

自他の心情的結合を重んずる倫理を日常的経験の場における「間柄」の立場から理解するだけで、日本人の倫理思想の伝統的特性は、はたして十分に明らかにされたのであろうか²³⁾。和辻の倫理的な日本人の存在様式に関する理解は、即自的な理解であるという意味あいでは、日常性のレベルをこえるものにはなっていない。たとえば、つぎのような文章で表現されるものと大した差がない。人びとは四季のうつりかわりを待つのでなく、いつもその変化に追いぬかれる。しかし早く準備をととのえすぎるとまた逆もどりがやってくる。四季の変化はたえず小さな渦をまき断続しながら、いつもかけ足で人の心をせきたてる²⁴⁾。

つまり和辻の「間柄」概念は、対自性的理解を欠いた散文的・文学的な理解の域に停滞している。

だから、ときには安保騒動のばあいのように、外国人が日本に革命騒ぎが起こったかと錯覚したほどのエモーショナルな瞬間的激情——「岸を倒せ」ムード——²⁵⁾が示されるにいたったさい、和辻の「間柄」的理解がどのくらいの学問的評価をえられるのかといえ、それはまことにたよりないものなのであった。すなわちそれは直観的・観照的、芸術家的な表現にとどまっていたとしかいいようのないものであった。

和辻のいう倫理は本質的に《間柄》的に、すなわち人と人、人と家族、人と社会がふれあう連関的場面に存するというのが結論であった。人間存在はその全体的性格からして、単なる個人でもなければ、単なる社会的実在でもなく、みずからが属する社会という場面に本質的に関係づけられた存在なのである²⁶⁾。つまりこのことは、和辻自身がいう日本的な人間存在のしかたである二重性格になる。「間柄」的な日本人の「しめやかな心情」は、内容からいうと、心と身体不可分、および人間と自然の生命の一体観である。西田哲学における「行為的直観」のばあいと同じように、そこでは身体を媒介にして、心つまり主体的なるものと、自然つまり客体的なるものが一体化し、心=身体=自然という関係がなりたっている²⁷⁾。

和辻の「間柄」概念は、日本人の人間存在の特殊なあり方、類推していけば企業経営が自然

と対面するしかたを、うまく説明する中身を含んでいる。しかしながら、今日における状態——日本人・日本の企業経営の自然観がもたらした害悪、自然破壊の現実、和辻式の学問方法による説明がもはや十分な妥当性をもたないことを意味している。そこには未来への政策(論)的提言力がないのである。なぜ、日本人が、日本の社会が、日本の経営が、そのような自然・風土への対応のしかたしかなしえなかったのかという点をしる概念としては、和辻の〈説明〉は大変役に立つ。しかし、だといっても、今後における日本の問題のあり方を考えるためには、彼の思考形態は克服されるべき対象でしかない。

和辻はハイデッガーを批判しつつこういう。その空間の主体化が自然を観照する主観であり、あるいは個人としての人であったがゆえに、主体化された空間が十分な意味において主体の空間性となりえなかったままなのである。いまや、その主体が「人間」として、すなわち個人的・社会的なる二重性格をもつものとして、規定せられた。かかる主体の空間性は人間の主体的な間柄であるほかはない²⁸⁾。それは空間問題の歴史がわれわれを導きゆく方向なのであって、われわれ(和辻)の恣意ではない。そこで空間問題の新しい立場がここに確立する。空間は単に個人的主観に即する理論的=観照的問題にとどまるのではない。それは主体的な実践において、しかも道具とのかかわりというごとき個人的な実践においてではなく、人間関係としての実践的行動において問題にされねばならない²⁹⁾。したがって問題は、ひっきょうするところ「人間」の二重性格を把握しているか否かにかかってくる³⁰⁾。

こうして和辻自身が確信をもっていうハイデッガーの問題性は、まさに、そのままひっくりかえして、和辻倫理学・風土論にあてはめられるべきものである。その問題は、人間存在の二重性格的理解の恣意化→理論的観照性、主体的・実践的行動の問題を意識的に把握しえているか否か、というものであった。

和辻は日本人という人間存在の特殊な存在のしかたを出立点における理解として示したにすぎない。経営学研究の観点からみて、和辻の「人間」哲学は即座に「経営における人間問題」に利用できるものとはいえない。

和辻の日本人の存在形態に関する「間柄」的な理解は、要は日本人は人と人との間柄のなかへ心から溶けこむという主観的な心情——これは現在でも日本企業や組織・機関に対する日本人の一般的没入のしかたである——の純粹さを重んじてきた³¹⁾、という日本人の心情特性をただそのままとらえたものにすぎない。いいかえれば和辻倫理学・風土論における人間存在の空間性の分析は、結果的にはいわゆる「間柄」に規定された人間の〈距離感〉の分析にとどまっており、自然の問題は放棄されている³²⁾。和辻の「自然観」をもってしては、現在の日本における深刻な自然・環境問題に対応しえないことは明らかである。

和辻が倫理学で空間性をいうばあい、それは結局、人間対人間の心理的肉体的関係になっている。いわゆる「間柄」の問題になっている。だから自然というものは倫理のなかに直接はい

っていない。そこにはやはり、日本人の思想史を流れている日本人の自然観の伝統が底流にあった³³⁾。人間を「人の間」として解するしかたは、日本人のあいだに古来伝統的に顕著に支配している人倫重視的な思惟方法が支配しているように思える³⁴⁾。つまり人間における自然が外的自然と明確に区別されずに癒着し、また人間と人間との共同〔連帯性〕も自然的なものを基礎にしていた³⁵⁾。

学究としての和辻自身は、そうした基礎から、理論的な対処方法において、精神的・心理的・肉体的に自由たりえなかった。風土自身が人間の歴史的・社会的活動の基礎であると同時に結果であることが、はっきり認識されねばならないだろう³⁶⁾。

福沢諭吉や加藤弘之らの天賦人權論が、人間の「個人」としての自立性を説きながら、徹底した原子論的な社会観をとりえなかった背景には、そうした特質をもつ日本人の伝統的な思考様式の問題も介在しているように思われる。問題の根は深い³⁷⁾。和辻自身が日本人の二重性格的な存在様式の呪縛のとりこになっている節すらみられる。なぜなら、文化や倫理の問題を中心主題にするかぎり、民族社会の伝統的特性から脱却した視野に立つことは容易でないからである³⁸⁾。

和辻は、過去に国家の概念を過度に強調していたし、戦後の著作に現われた変化もいまだ未解決の問題として残されている。さらに和辻の「社会的連関論」や倫理学は、人間存在に対する風土の影響をきわめて重大な基礎としている。彼の見解は人間の内面性と人間世界の社会的諸様相を超越しうる価値体系を欠如していた。変化する社会関係は妥当な倫理学的原理を確立するための確固たる基礎とはなりえない。和辻が確立しようと試みたのは、そのような妥当な倫理学的原理であったはずである³⁹⁾。今日的な地平から吟味するに、和辻式の人倫観がそのまま現在に通用するわけがない。だが、和辻のいう「間柄」の倫理、すなわち相互の信頼と真実にささえられてなりたつ日常性の倫理という考え方は、少なくとも日本人の伝統的倫理観の表現として受けとるかぎりでは、基本的に正しいといってよい⁴⁰⁾。しかしまた、共同体国家の理念については和辻の見解はもはや支持しがたいだろう⁴¹⁾。

本稿の筆者が考えていることは、和辻の日本人に関するその伝統的倫理観を、今日的に再生させ活用してみようとする点にある。またこの点を、日本の経営学の特殊化(個体化・土着化・風土化—相対化)のために生かそうとすることも考えている。

人文科学の分野で、精神病理学的考察の出発点となるべき自己存在の問題や、自己の人間としての生き方の問題の根底にあって、これを規定する要因として、風土というものに眼をむけてみる必要があるといったのは、木村 敏である⁴²⁾。木村は日本人の人間性の特徴を精神科医の眼からもう一度みなおし、場合によっては実際の精神病の症例に即して、そこに現われている日本的な生き方の特殊性をとりだそうと試みている。このとき「人と人との間」(水平的にむすびつく拘束性)という観点が非常に重要だとする⁴³⁾。しかし、病的精神現象の日本の特性をただちに

日本の文化や社会構造から説明するわけにはいかない。木村が使った「人と人との間」とか「風土」とかは、文化や社会構造のもうひとつの根底にあって、それらに対して規定的に働いていると同時に、種々の精神病理学的現象に対しても同じように規定的に働いているものである⁴⁴⁾。

このように、木村は精神病理がこうむる風土的規定からの作用要因を問題にし、日本人の人間性をもつ特徴＝特殊性を医学的な立場において析出しようとする。木村の風土問題のとりあつかい方では、「風土」ないし「人と人との間」というものは、どちらかという、筆者のいう自然的風土よりも理解されており、また文化や社会構造というものは社会的風土よりも理解されているようである。したがって、木村の著作『人と人との間』を評した論者がいうように、木村は文化や社会構造のほうをとりあげずに、病的精神現象の日本の特性を「人と人との間」とか「風土」とかの彼自身の基本概念からながめたという分析手順にとどまっている⁴⁵⁾。

筆者の関心「経営と風土の接点」からみるに、木村はこの問題構成の方法枠組を人文科学分野において支持してくれる見解を提供しているが、その内容を具体的にかたちづくる諸契機は明らかにしていない。もちろん木村の意図自体は至当なものといえよう。木村は、種々の病的精神現象が地理的・民族的あるいは歴史的・時代的な文化の多様性という、いわば偶発的な条件によってこうむる差異の底に、自然そのものがその風土的差別相において現出している一般の意味方向を見出そうとするのである⁴⁶⁾。いうなれば、特殊化様相をもたらす風土要因を、風土そのもののそのまた一般的な問題位相において、理論的にとらえなおすという意図が、木村にはある。換言するとこうなる。一方で文化による差異を超越した普遍の意味方向を求め、他方でこのような文化による差異の根底をなしている人間の生き方の差異を求めるという二重の課題は、一見たがいに矛盾しているかにみえる⁴⁷⁾。

以上の木村の主張を図式的に理解してみよう。〈普遍の意味方向 ↔ 文化 ↔ 人間の生き方〉。筆者の「経営と風土の接点」でなぞらえると、〈経営 ↔ 文化的風土 ↔ 人間の生き方〉になろう。ここでは「自然的風土」としての風土要因は鮮明に浮上してこない。これは木村が風土(ないし文化)とか社会構造によって風土側の要因を包括的にしかとらえていないためである。

——さて経営学者は風土問題をどのようにとらえ、表現しているだろうか。

経営史専攻の中川敬一郎は欧米と日本における人間存在のしかたのちがいを、こう論述している⁴⁸⁾。

端的に言って英語でソーシアルとかソサエティとかいうばあい、それはまず「わたしとあなた」との関係であり、職場で机をならべる同僚との関係であり、となりの主人や奥さんとの関係である。つまり欧米社会の個人にとっての社会とは、あくまでも個々の人間主体を出発点にし、個々の人間と人間との関係の集合体としてはじめてなりたつ。これにくらべて、日本人にとっての「社会」とは個人の意識や行動とは無関係に、むしろ個々の人間に対立してドカッと

いすわっている怪物のごときものであって、個人と個人との関係が出発点になっているものではない。

ここには、和辻のいう日本人の人間存在の特殊なしかたが個人的・社会的な二重性格として「人と人との間柄」的にあるという理解に、対照的な理解が書かれている。和辻の主張が全体性に重きをおく立論であるという解釈に、個々の人間に対立してドカッといすわっている怪物のごときものとして中川により説明されているものが、内容的に対応することはいうまでもない。

現在の日本社会でいうならば、まずいちばんに企業社会、そのつぎに国・地方自治体という行政府(こまかくは町内会、自治会)、さらには各種団体(宗教団体、芸術団体)が、そうしたものであろう。抽象的にいえば、世の中、世間ということばで表わされるものが、それであろう。日本的な集団主義・全体主義のつぼのなかでは、日本人の個人と個人の「関係」は「人と人との間柄」というあり方以外には発現のしようがないのであろうか。

欧米社会との比較で考えると、日本の人倫観は旧約聖書の十戒とみくらべるに、そこにはまったく異質なものがある。そうした風土、そこから生みだされた社会構造、そのなかから生みだされたものは、一言でいって人間関係の過度の重視ということである⁴⁹。その根本は個の自立を条件にする欧米の人間関係ではなく、日本人の「人と人との間柄」という人間関係にある。

具体的に考えよう。日本人は日本の企業経営のなかで人間としていかに生きているのか、その生きざまの問題である。

田尻宗昭は公害摘発の最前線で悪戦苦闘してきた人物として、こういうことをいっていた。会社幹部の一人ひとりのごく普通の人間で、むしろ個人としては善良なところすらあるのに、それが集団になると、もうまったくちがってしまい、戦闘的になる。彼らは彼らなりに企業というしがらみのなかで、ひたすら企業を守ろうという忠誠心でいっぱいなのである。しかし、その塀のなかにとじこもるあまり、この時代の大きな流れがみえないのである⁵⁰。

日本人の人間存在の特殊なしかたが、まさに二重性格的——それも全体性・社会性偏重のものであらざるをえない事実が、今日の企業経営の場に生きる人間の実例において如実に現われている。感傷的にいえば、げに悲しきことである。そのばあい、その一個人である会社幹部にとって「人と人との間柄」(→集団主義)を形成する場は企業のなかにしかなく、それ以外の人間との関係は地に足がついたものとして成立しえないことになっている。

欧米的な個人主義的な人間存在のあり方、これと企業経営という存在との関係に比較して、会社(わが社)に自分を全生活面にわたって関与帰依させながら生きようとする志向性を基幹的・深層心理的に確実にもつ日本の勤労者の態度と心情は、倫理的な問題もからみあって検討されるべき課題となろう。

さきほどの田尻はまたいう。企業の考え方はその閉鎖集団のなかでどうも平衡感覚や社会常

識が欠けている⁵¹⁾。行政と企業の癒着の問題からみても⁵²⁾、もう自治体が住民の砦になる以外ない、と⁵³⁾。

この田尻の発言は、地域主義的な発想が必要とされる背景にふれるものと解釈できよう。地方自治体も行政機関であり、日本社会における「全体性」を象徴する制度体であるが、そこでは新しい含意がこめられている。

和辻倫理学と戦前・戦中における国家主義の関係については、家〔族〕と国民の全体性を同一視すること(忠孝一致の主張)のまぢがいに對して、和辻が的確な指摘をおこなっており、この点は尊重されてよいという見解がある⁵⁴⁾。しかしながら、この見解は和辻の全的な評価において生じている問題を少しも相殺しうるものではない。

欧米と日本の人間存在に関する比較で考えよう。キリスト教の良心は神と人間とのつながりにおいて意識されるが、日本人のあいだにおける「義」は人と人(上位者と下位者)とのつながりがいくつまでできるほど、その数だけいくつも「対何々への義」としてできあがる可能性を構造上もっている⁵⁵⁾。

日本人と企業経営の関係でみれば、その「義」の関係は「人と人とのつながり」—「人と人との間柄」として、企業が上位者となり、従業員・労働者が下位者となる。会社の人間が個人のとときの態度と会社を後楯にしたときのそれとのちがいでみせる貌変ぶりはそのよい証左である。最近、ある事件〔企業犯罪〕がらみで自殺におこまれた会社マン氏、いわく、「会社の生命は永遠です」と。いったい会社(彼は某商社取締役常務であった)のために個人がいるのか、それとも人間のために企業があるのか。資本主義体制下の企業経営を考究するさい、わかりきっていることながら、日本人の存在感覚の特殊性を関連させて問うべき問題である。

日本人の同胞意識や同質性、日本社会・文化の一様性は、日本の地理的条件や歴史的条件によって培われたものにちがいはない。このような特性の制約から解放されて自由に思考し、行動することは、日本人にとっては非常に困難である⁵⁶⁾。昔は(今も?)村落共同体的規制、現在は「企業」共同体的規制という掣肘から日本人が自由に飛躍しうる日はいつくるのか。

和辻の立場は真に媒介性をもちえていない。それは外に物にかかわる関係としての三人称判断世界を欠くとともに、内に超越にかかわる関係としての二人称判断世界を欠くものとしての抽象的な二人称世界にとどまる。したがって、外的にはそれは社会や自然に客観的にかかわることが不可能であり、またしたがって客観的实在の法則的探求としての特殊諸科学にむすびつくことができないとともに、他方内的に、主体性を強調するにもかかわらず、実存哲学の徹底的な有限性の自覚にもとづく超越にかかわる実存的自覚を欠いている⁵⁷⁾。

こうした和辻解釈は、和辻に対してとてつもない拒絶の見解を示しているように映る。だがその論及内容は和辻倫理学・風土論の基本的問題点を指摘するにすぎない。筆者からみるばあ

い、和辻の論が特殊諸科学にむすびつくことができないという解釈は、深刻な問題提起であると受けとればよいのである。この問題に特殊科学としての経営学はいかにかかわりうるのだろうか。

ルネッサンス・ヨーロッパのヒューマニズムは必ずなんらかのかたちでアイデアにさきだたれ、それを媒介として成立していたのに対して、日本のヒューマニズムはむしろいっさいのアイデアを撻無した純粹内在の地平ではじめて花ひらく人間主義だったのである。このように、アイデアという精神の自立的構成体を媒介とせぬ「人間的」とは、したがってそのまま「自然的」と同じ謂いにほかならない⁵⁸⁾。日本社会では人格の諸活動が機能的に把握されないので、機能的な部分社会というものが成立しえず、社会関係が成立するかぎり個人はそのなかへ全面的に没入することを要求され、個人の全面的な同質化を要請するような共同体のみが形成されるのである⁵⁹⁾。これが日本人の特殊な存在形態として自然的なあり方なのである。このあり方は人間の関係を客体的にみすえたものではありえない。

だから、日本人にとっては、本来、部分社会 (association, the secondary group, Gesellschaft) たる企業経営が、人格、家庭、社会というひろがりのなかにおいて、あたかも唯一世界のように観念され、この知覚内においてしか意識も行動もなしえないのである。そうすることによって、日本人は心の平安もえるという反面の事実をみのがしてはなるまい。

日本の共同体は人と人とを人格として平等にむすびつける契機をもたなかった⁶⁰⁾。それゆえ経営学という学問にとって気になることは、これが研究の対象にする企業経営＝「日本の経営」は、人と人との間に真の人格的な関係を打ちたてる⁶¹⁾場になりうるだろうかということである。

哲学的に考えてみたい。この日本においては「あるとあるとの共存」すなわち「あるの世界」は不明確であまいのである。そして「あるの世界」が内向的、自己内充足的であり、自己内閉鎖性を帯びてきている。要は「ある」の普遍化、「ある」のコスモポリタニズム、個人主義、「われ思う」の「われ・我・自己・私」の確立の場にとぼしい。これは単に前近代の日本の精神構造の特色であるばかりではなく、現在でもそうなのである。要するに日本人には固守すべき自我の核が存在、固定してはいない。日本人は普遍的、抽象的、観念的、静止的、思索的ではなくて、具体的、即物的、現実的であり、また動的、活動的、流動的、情緒的、情動的、気分的、「もののおわれ」的であり、機敏で現実対応の即断処理にすぐれている。日本人にとっては「もの」とは「自己・私」をも含めてのすべてなのであって、そして現在、この時代とは、この日本人の「もの」のあまりにも拡散、稀薄化に、さすがに日本人自身がとまどっている時代なのである。日本人は「内にもって外を意識する」、すなわち対他意識のままに自己内閉鎖をおこなうのである⁶²⁾。日本の勤労者意識しかり、日本の外交方針・姿勢しかりである。問題は日本人がそのような自分の精神構造を意識化しているか否かにある。これは難題である。その答は上述中におおまかには書かれている。

日本の経営学にむけられることばとして、つぎの意見を聞こう。

哲学・倫理学という学問はそんなにむずかしいものではない。ただこの学問とわれわれの生活、社会生活の現実との対応が、この学問にとってはむずかしいだけのことなのである⁶³⁾。哲学者は理論によってえた統一的な生の原理をたずさえて、再び実生活の場に立ちもどらなければならない。そこはみずからが獲得した原理が真に原理の名に値するかどうかを検証される場であって、こうした検証を無視して立てられた原理は、実ははじめから無内容のものであったというべきであろう⁶⁴⁾。

日本人の精神構造が原理的ではなく、融通無礙であり、かつ実際的であることは⁶⁵⁾、実は現実存在とは無関係に、別世界で原理を理論として構成する通弊からきている。日本の経営学にはそのような理論が多い。この学問は自分自身によって立つ風土、地域生活の特性を配慮した営為をおこなってこなかった。

さて、それでは、日本人の風土的な性格である二重性格（個人的・社会的な人間存在の様式）は、筆者の問題構成の方法である「経営と風土の接点」において、どのように解釈されむすびつけられることになるのか、これを考えてみたい。また、本節がかかげた課題である「日本人と経営問題」という論点は、そうした問題構成の方法において、いかような《媒介の論理》をもって分析されることになるか考えてみたい。

日本人の行動様式には、個人としてのそれと集団としてのそれがある。つまり二重性格的なのである⁶⁶⁾。

『個人』——静、おとなしき、礼儀正しき、臆病、おどおどした態度、お人好し、素朴、意見不明、人間的。

『集団』——動、やかましい、傍若無人、頑固、粗暴、きびきびした態度、ぬけめない、統一された意見、力、非人間的。

このうち日本人の「集団行動」であるが、それにはまた二つの面がある。

集団行動 (A) ——秩序・統一・力→集団としての日本人の〈昼〉の顔=オフィス、工場、職場、その他公けの場における行動。

集団行動 (B) ——無秩序・粗暴・暴力→集団としての日本人の〈夜〉の顔=飲み食い、宴会酒席、ショッピングといった非公式の場における行動。

ただし集団行動 (B) は日本人自身にとっては無秩序にも傍若無人にも感じない。日本人の許容範囲における秩序は守られているはずだからである。だが、日本人以外の外国人には (B) の説明どおりに受けとられる。

集団行動 (B) は無礼講なのである。だが異文化環境ではこれは通用しない。富と権力と素姓、そして国際的環境下での教育をバックにした東南アジアのエリートをまえにすると、日本の

エリートのは大半はあまりに貧しすぎる。ほとんどは日本国内でのみ通用する学歴のみによるエリートであり、その行動に表現されるものはあまりに貧しく文化的に下劣であり、国際標準からみて粗暴である。粗暴、あるいはそうだとみなされる行動は、コミュニケーションの断絶によっても生ずる。その結果、日本国内でのみつうじる価値意識の、異文化環境での文脈を無視した誇示となって、その行動は示されることになる。いく層倍かに輪をかけた誇大表示となって……。

こうした日本人の無秩序的行動——祭の直会・饗宴にみられるものは、端的に言って神を敬ばすために神のゆるしのもとにおこなう無礼講だといってよいとすれば、東南アジアの人々からその行動の由来する脈絡が理解できないいらだちとともに、日本人の行動に対する批難の大きな原因ともなっている行動こそ、まさに祭の行動にその原型、あるいは理念の根源をもつものだといえそうである。

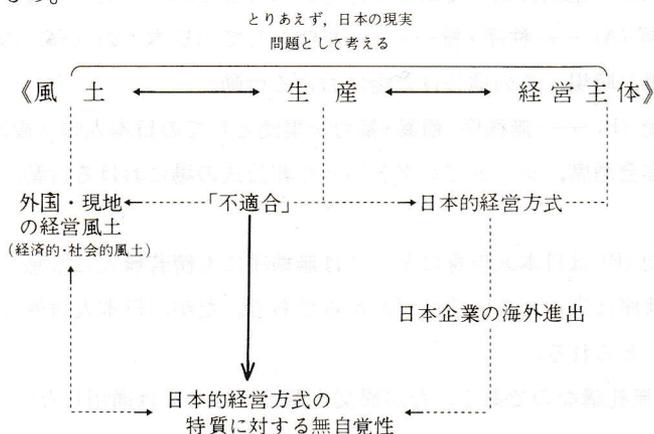
この無礼講は日本人の人間存在の特殊なしかたである「人と人との間柄」という関係から誘出されるひとつの現象である。したがってそれがそういうものであるかぎり、実存的自覚を根本的に欠き、自己客体化を徹底しえない日本人の行動様式は、外国人には理解をこえた「集団主義」によるものと受けとられる。この日本人の行動様式たる無礼講は、今日の日本社会の構造、人間構造、精神構造を支配しているものが、依然として稲作文化的なもの、村落的なものではないか、という点になんらかの関係がありそうである⁶⁷⁾。

問題は風土、それも自然的風土の契機、に大分接近してきた。

日本の海外進出企業を考えよう。日本人たちが、先掲分類上、集団行動 (A) と (B) のうち、その (B) を外国人に感じさせることは、既成の事実である。

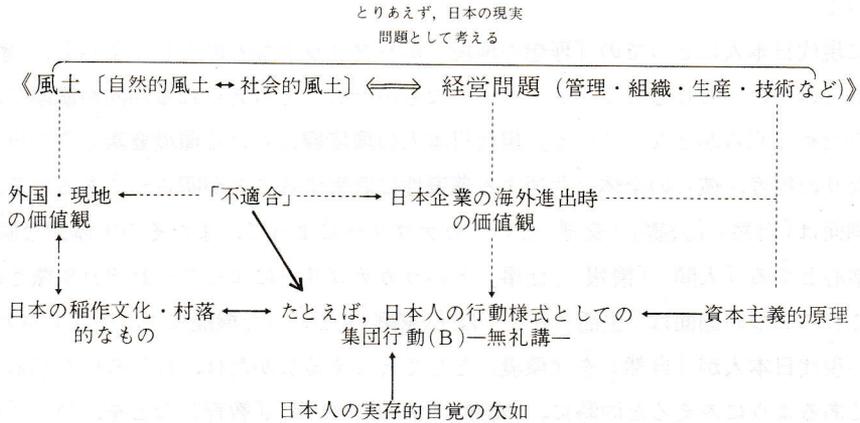
本稿のIV-(i)のなかでいつくか掲示した筆者の、「経営と風土の接点」に関する図式的理解を応用して、本節がとりあげた論点を分析表現してみよう。

まず、こういうもの。



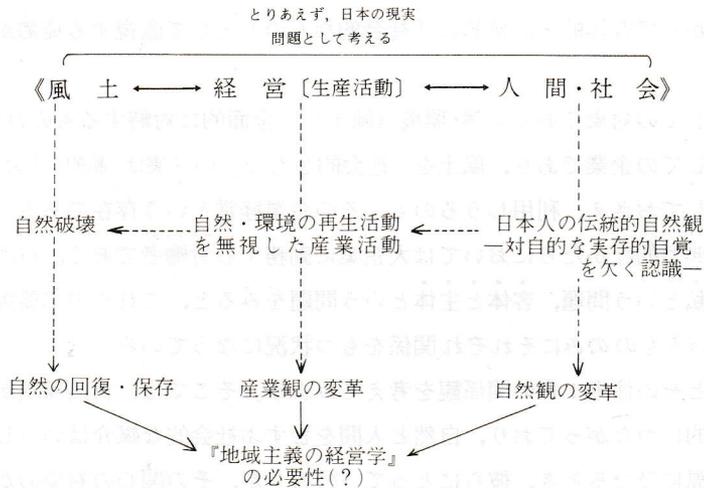
図・5. 「経営と風土の接点」例図・1

つぎに、別のかたちでもう少し内容を足して書こう。



図・6. 「経営と風土の接点」例図・2

もうひとつ出しておこう。



図・7. 「経営と風土の接点」例図・3

日本人ないしは日本企業がいだいている自然・風土観はどういうものなのか、「経営と風土の接点」→《媒介の論理》を模索する方途で、さらに考えていこう⁶⁸⁾。

日本人にとっては、〈自然〉は手入れされ、かいならされていなければならない。また「箱庭の実物大模型」として、消費の対象としての〈自然〉環境というとらえ方である。すなわち、

かつては生業経済とかかわる生産の対象であった自然が、現代にあつては主として家庭生活とかかわる消費の対象としての〈自然〉にかわつたことにある。それはまさにかぎりなく「箱庭」に似ている。

さらに現代日本人にとっての「理想の環境」がパブリックなものとしてよりも、「家族」や、「家庭」といったいちじるしくプライベートなものとしてとらえられる傾向が濃厚であることが、あらためて明らかとなっている。現代日本人の環境観における環境要素とそのカテゴリーは、かなりの程度、彼らの全体に共通する普遍性に収束することが明らかである。その客体化された側面は「自然」「公害」「交通」というカテゴリーによって、またその主体的な側面は「家族」を中心とする「人間」「情報」「仕事」というカテゴリーによってそれぞれ象徴される。とともにこれら二つの側面は「生活」もしくは「〈家庭〉」といった機能によって媒介されている。そのさい現代日本人が「自然」を〈環境〉としてとらえるしかたは、むしろいちじるしく“直接的”であるようにみえると同時に、「交通」「情報」「仕事」「教育」などを、ひとつに統合された「社会的なもの」としてとらえるしかたはいちじるしく稀薄である。

こうした現代日本人の環境観は、本稿の論究に根底からかわる内容を示している。

まず、家庭が消費対象としての自然しか観念しえなくなっている事実（→箱庭観）がある。つぎに、プライベートとしての環境観しか自覚しえていない事実である。さらに、自然・環境（風土）にむかって客体的・間接的に「社会的なもの」として直視する姿勢がもてないという事実である。

生産領域としての対象である自然・環境（風土）に全面的に対峙するものは企業経営—資本主義的経営としての企業であり、風土を「社会的なもの」（から実は〈私的なもの〉へと転換させながらであるが）としておさえ、利用しうるのも、その企業経営という存在である。しかも現代日本人の多くは、典型的なかたちにおいては大企業に勤務する労働者である。自然・環境（風土）に関する公と私という問題、客体と主体という問題をみると、これらの二要因は別個に、企業経営と家庭というもののみにそれぞれ関係をもつ状況になっている。

現代日本人とその住宅：家の関係観を考えてみよう。そこでは、自然環境がきわめて個人的な関心と直接的につながっており、自然と人間をむすぶ社会的な媒介はいちじるしく稀薄である。家庭の幸福にひたるとき、彼らにとって「公害」が、その関心の対象のかなたに拡散してしまうことは、ある意味で無理からぬことであろう。つまり現代日本人は、あらゆる「自然の豊かな恵み」につつまれるとともに、あらゆる「都市の便利さ」にも同時につままれたいと考えている。こうした彼らの理想とする環境イメージを一言でいうならば、「都市の近くにある、便利な〈箱庭の実物大模型〉」とでもいう。いずれにしろ、すぐれて「消費の対象」となった「風景」としての「自然」につつまれながら、同時に「都市的な便利さ」を享受し、一個の個人としての自分の趣味にかなつた「住宅」を建て、そこで「家庭の幸福」をあたためること、

そしてそこには、もはや「公害」などといった「問題」としての「社会的なもの」が介入したりするスキはないこと——、ここに彼ら、現代日本人の環境観のゆきつくところの問題性があるように思える。

現代日本人の自然・環境（風土）観が一般的にそのような実態にあるならば、というよりもそのような実態にあるからこそ、この国の企業経営は公害・環境問題の深刻化に非可逆的な様相をもたらすほどに左袒してきたし、また住民としてのこの国の人間たちは、生活の場からそうした実態に対してすばやく反応を示すことはできなかった。

「自然と人間をむすぶ社会的な媒介」という「社会的なもの」に関する意識化がきわめて稀薄である現代日本人の風土観は、企業経営という存在に出会うにいたるや、惨憺たる結果をもたらすはめになっている。現代日本人においては、個人人格をもって「社会的なもの」に関与するよすがは、住民としての一個人の単位で判断すると、かなり脆弱である。そのかわりその分だけ、企業経営のほうに自然環境：風土とのかかわりを「社会的なもの」（社会的制度・機関）として、ますます多く専有しつつある。現在、日本の国土のなかで、たとえばその海岸線地域はいったいどのくらい企業経営のもの、私有地になっているかを考えてみればよい。

経営学は日本の学問として、以上のような問題にいかにとりこんでいくべきなのか、風土観の問題も関連させて究明していくべき途が考案されてよいはずである。経営問題と風土問題のあいだに介在するにちがいない「社会的なもの」→《媒介の論理》を分析し、鮮明に透視することが望まれる。もっとも日本の知識人は「社会的なもの」を統合的に客体視することを苦手とする。彼ら自身がこの国の人間の所有する自然環境・風土観にとらわれているばあいが大変多いのである。問題の出発点にそもそも障害が横わっていることになる。日本の経営学にひとつの大きな変革が要請されている。筆者はこのことをひとまず「地域主義」という提唱にかけて考えてみたく思う者なのである。

注

- 1) 石関敬三『世界・人間・歴史』文眞堂，昭和53年，55頁。
- 2) 同書，60頁。
- 3) 筆者の日本経営学説研究については、『日本経営学史—規範学説の研究—』白桃書房，昭和57年を参照されたい。
- 4) 丸山真男『戦中と戦後の間』みすず書房，昭和51年，446-447頁。
- 5) 西村朝日太郎『文化人類学論攷』日本評論社，昭和34年，172頁。
- 6) 磯辺秀俊『農業経営学』養賢堂，昭和46年，4頁。
- 7) タカハラ・タケヨシ『土着の学問の発想』東洋経済新報社，昭和48年，46頁。
- 8) 同書，240頁。
- 9) 同書，53頁。
- 10) 同書，263頁。
- 11) 同書，224頁。
- 12) 和辻哲郎『風土』岩波書店，昭和10年，18頁。

- 13) 同書, 148頁。
- 14) 同書, 138頁。
- 15) 同書, 143頁。
- 16) 関 栄吉『文化社会学概論』關書院, 昭和31年〔東京堂, 昭和4年初版〕, 49頁。
- 17) 古川哲史編『日本思想史要説』文化書房博文社, 昭和53年, 278-279頁。
- 18) 同書, 283頁。
- 19) 同書, 286頁。
- 20) 朝日ジャーナル編『新版日本の思想家 下』朝日新聞社, 昭和50年〔信太正三稿「和辻哲郎」〕206頁。湯浅泰雄編『人と思想 和辻哲郎』三一書房, 昭和48年, 信太, 同稿, 64頁。
- 21) 湯浅編, 同書, [湯浅稿「解説 和辻哲郎研究への視角」] 310-311頁。
- 22) 同稿, 313頁。傍線以下には筆者の補足あり。
- 23) 日本思想史講座 別巻2『研究方法論』雄山閣, 昭和53年, 41頁。
- 24) 会田雄次『日本の風土と文化』角川書店, 昭和47年, 118頁。
- 25) 室伏哲郎『日本のテロリスト』弘文堂, 昭和39年, 190頁。
- 26) Piovesana, 宮川 透・田崎哲郎訳『近代日本の哲学と思想』紀伊國屋書店, 昭和40年, 134頁。
- 27) 湯浅泰雄『近代日本の哲学と実存思想』創文社, 昭和48年, 227頁。
- 28) 和辻哲郎『倫理学 上』岩波書店, 昭和40年改版〔昭和12年初版〕, 185頁。
- 29) 同書, 187頁。
- 30) 同書, 186頁。
- 31) 講座国民性の教育 第1巻『国民性とは何か』明治図書, 昭和44年, 172頁。傍線内補足は筆者。
- 32) 湯浅編, 前掲書, [湯浅稿] 364頁。
- 33) 同書, [「討論 和辻哲郎の学問と思想」] 44頁。
- 34) 同書, [中村 元稿「和辻学の未来的意義」] 131頁。
- 35) 36) 岩波講座 哲学XVIII『日本の哲学』岩波書店, 昭和47年, [城塚 登稿「人間学の可能性」] 187頁。
- 37) 同書, [古田 光稿「社会的存在の自覚の論理」] 228頁。
- 38) 日本思想史講座 別巻2, 前掲書, 40頁。
- 39) Piovesana, 前掲訳書, 136頁。
- 40) 日本思想史講座 別巻2, 前掲書, 38頁。
- 41) 同書, 37頁。
- 42) 木村 敏『人と人との間』弘文堂, 昭和47年, はしがき, III-IV頁。
- 43) 同書, はしがき, II-III頁。
- 44) 同書, はしがき, V頁。
- 45) 大原健士郎<書評 木村 敏著『人と人との間—精神病理学的日本論—』>, 『読売新聞』昭和47年6月30日, 朝刊, 17面, 「読書」欄。
- 46) 木村, 前掲書, 230頁。
- 47) 同書, 238頁。
- 48) 中川敬一郎編著『経営理念』ダイヤモンド社, 昭和47年, 55-56頁。
- 49) 江口武憲『福音と風土』聖文舎, 昭和42年, 10頁。
- 50) 田尻宗昭『公害摘発最前線』岩波書店, 昭和55年, 131頁。
- 51) 同書, 41頁。
- 52) 同書, 42頁。
- 53) 同書, 192頁。

- 54) 青山道夫『家族制度論』法律文化社, 昭和39年, 170頁。
- 55) 山田太郎『日本人の精神と西洋人の精神』青年社, 昭和49年, 310-311頁。傍点は筆者。
- 56) 林 健太郎代表『アジアのなかの日本』東京大学出版会, 昭和50年, [平野健一郎稿 VIII「日本のアジア外交」] 204頁。
- 57) 鈴木 亨『響存的世界』合同出版, 昭和42年, 76頁。
- 58) 竹内芳郎『イデオロギーの復興』筑摩書房, 昭和42年, 32-33頁。
- 59) 隅谷三喜男『日本社会とキリスト教』東京大学出版会, 昭和29年, 138頁。
- 60) 同書, 139頁。
- 61) 同書, 62頁。傍点は筆者。
- 62) 岡崎公良『「ある」の世界』新樹社, 昭和54年, 194-196頁。
- 63) 同書, 344頁。
- 64) 宇都宮芳明『哲学の視座』弘文堂, 昭和53年, 30-31頁。
- 65) 宮川英二『風土と建築』彰国社, 昭和54年, 242-243頁。
- 66) 講座比較文化 第6巻『日本人の社会』研究社, 昭和52年, [青木 保稿「無礼講と異文化」]。以下, しばらくの叙述は本稿からの引用参照にもとづく。
- 67) 江口, 前掲書, 11頁。傍点は筆者。
- 68) 石毛直道編『環境と文化』日本放送出版協会, 昭和53年, [高田康孝稿「現代日本人の環境観」]。以下, しばらくは同稿, 440-453頁による叙述。

—つづく—

(べえ ぶぎる 経営学原理専攻)